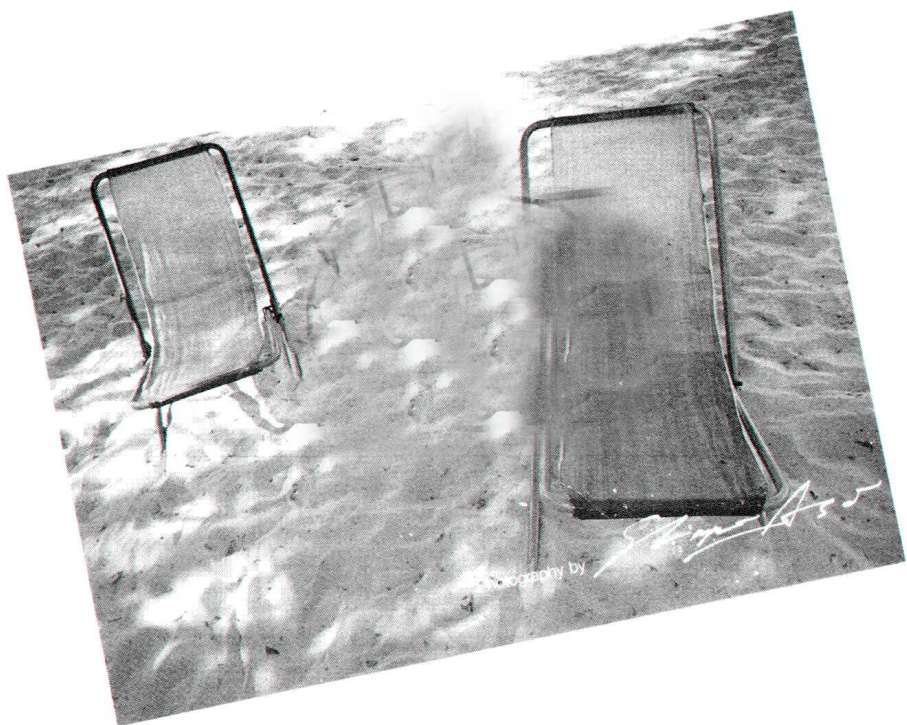


BY THE WAY

高橋三千綱

DV THE WAY

高橋三千綱



BY THE WAY

著者／^{たかはし みちつな}高橋三千綱



印刷／昭和57年9月10日

発行／昭和57年9月15日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

〒162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

tel.／業務部03(266)5111・編集部03(266)5411



印刷所／株式会社光邦

製本所／大口製本株式会社



定価／980円



©Michitsuna Takahashi, Printed in Japan. 1982

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

■タイトルについて著者からひと書■

もともと、横文字というのは好きではない。会話の中に、チラと、英語の単語らしいものを入れて喋る人に出会うと、それだけで不信の念を抱いてしまうのである。

さらに嫌いなのは、本来横文字で書くはずの言葉をカタカナに直して、平気で縦文字の日本語の中にぶち込んで得々としている人たちである。

例えば「世界におけるジャパニーズカルチャーのアンダスタンディングは極めてローレベルであり、それは日本人の根強いインフエリオリティコンプレックスに原因があるとはいえ、そのイグノアーされたシチュエーションはまぎれもなく我々文化人にフラストレーションを感じさせ、いかにパーサバランスの心でいてもパーミットできないものがある」などと平気で講演をしている自称文化人がいるが、聞いている方では何を言っているのかさっぱり分らないのだ。いつそのこと、全て英語で喋ってくれた方がよほど分りやすい。もつとも、日本語の中に時折顔を出す英語らしきものの発音を聞いていると、全部英語で喋られても、やはり理解はしにくいだろうな、と想像されるのである。そういつた小器用なみせかけ教養人と付き合うのは、まっぴらごめんなのである。恥らいというものは、やはり、男女の別なく大切なものなのね。

そういえば、大学の教授などにも見せかけ大好き人間がおりました。我々年下の者に話すときにはやたらに横文字をちりばめ、そのくせアメリカ人の前に出ると、ヘラヘラ笑っているばかりで一向に口を開かない。たまに開いても「アイシ」ばかりで、ちよつと変ったことを言いだしても相手にはまるで通じず、それでも教授の肩書きだけは離すまいと、必死にしがみついております。したな。つまり、私としては、日本語の中に横文字を使う人は信用しないことにしているのである。

そんなふうなことを呟きつつ過ごしているところへ、エッセイ集の出版時期が煮詰ってきた。私が物書きとして生きて以来、あちこちの雑誌に書いたものがだいぶあり、小遣い銭ほしさに書いたものもあれば、本音を言うのが恥ずかしくてわざと的を外したものもあり、つい気負って口を出したものもある。それらを一堂に会してズラツと並べてみようということになったわけである。

私が物書きとして出発したのが二十六歳の時だから、もう三年にもなる（失礼、八年の間違ひであった）。その間に書いたものを一冊にまとめ、しかも値段をつけて売ろうというのだから、よほど著者本人に魅力があるか、読者がたくさんついてるか、文化的指導者でなくては商売にならないはずである。そして、そういつたむつかしいことは一切考えないことにして、これまでの雑文をまとめることになった。

本の題名は全く考えなかった。数年前に、私のやっている野球チームの男たちの恋愛観を中心に女性週刊誌に連載していたものを、まとめて一冊にしたことがあったが、やはり本の題名は考えつかなかった。そのときやってきた編集者はあれこれと仮題を言っていたが、私はフンフンと聞き流していた。そしていささかやぶれかぶれの気持で、しかし非常に厳肅な表情で、『こんな女としてみたい』というのはどうであろうかと切り出した。編集者は小便をして帰っていった。

さて、今回の本を出すにあたり、競馬場からうなだれて帰ってきた私をイキのいい編集者が捕まえて、いきなり『バイ・ザ・ウェイ』にしましょうと言った。オレは横文字は嫌いなのだ、という信念は馬に食わせたニンジン量の多さに吸いとられて霞がかかっており、ついにエッセイ文化人の仲間入りをしたかという感慨にとらわれることしばしであった。その後精神力が徐々に回復した私は、秘かに『私でよかつたら差しあげます』という題を考えたのだが、まるで性的欲求不

満をモロに、しかもいじましい形で出していることに気付き、一転して強気になり『おれの精神はアメリカン』としたのだが、やはり、心配しないで股を開け、という魂胆がミエミエでやめにし、やけくそになって『さり気なくドドメ色』としたが、そのときには、ついには落ちるところまで落ちた己れを認識したのであった。そして、眼鏡をかけた、いかにもかつては勉強少年であったという気配のある、そして今は、よろず相談子作り手伝い人妻歓迎値段次第でおかまも宜しい多角経営風編集者の主張する『バイ・ザ・ウェイ』に匹敵しうる題名は、今の自分からは生まれえないと悟るに至ったのである。

これは、日本語では、通常、ところで、と言われる言葉である。本筋からはずれたことへ話題を転換するとき用いられる言葉である。それは、英語にしても同じで、商売の話をしていた人が、ところで君の妹は元氣かい、と本題とは無関係な、軽い話に切り換えるときなどに使われる。ところが、日本人が使うと、ときとして妙なことに「バイ・ザ・ウェイ」と言ったあとで重要な話に入ったりする。そのため、アメリカ人などは、日本人の使うバイ・ザ・ウェイはややくしくて仕方ない、とこぼす。日本語の「ところで」も同じように、たわいない話のあとで、ところでこの本の印税ですが、ときいきなり急所に迫ってくる場合に使用されることが多く、やはりやばくて仕方がない。さしずめ、日本人の多くは、ミスター・バイ・ザ・ウェイとでもニツクネームをつけるべきかもしれない。

本書のバイ・ザ・ウェイは、本来の軽い話題転換と、どさくさ紛れの本音とが、てんでに混ぜ合わさっている。by the wayには、旅の途中で、という意味もあるが、日本語にするには、人並にてらいがあるようである。信じられないことなのだが。

●CONTENTS●

工房の秘密

- 男のねぐら 12
棲家について 16
仕事部屋を持つ記 19
安酒三昧 22
黒いペースメーカー 26
電話は個人のもの 29
子づくりから殺人まで 31
富士山に見える部屋 37
三本足の猫 39
ブル田さんのこと 41
墓参り 43
霧の彫刻 45
五月の風の中で 47
退職、就職 51

一人芝居

- 四季のない街で 56

58 デラノの夏ふたたび

62 拳銃と夢と

65 わが素材アメリカ

68 ウィンドサーフィン

70 二泊三日も旅のうち

72 志賀高原まで

77 木曾路

79 千倉の海女

81 水納島の蛸

84 ちょっと南極まで

書棚に手を伸ばすとき

90 父の競馬研究

93 最後の文士

99 ある差別

103 こんにちはコロンパス

106 何気なく手にした一冊が

110 誇りと格調と

116 無抵抗な青春

128 昭和の坂本龍馬

小説家の妻 137

男たちの習性

夜の男 142

つっぱりは男のロマン 143

遅刻癖 145

銀座でキスした16歳 147

おしゃれ鈍感派 153

アメリカの夢、男たちの夢 154

サレンダー 158

草野球賛歌 161

十四人の仲間 164

オマンコについて 167

運転技術向上せず 170

葬式に来る人 174

ダフ屋との暇潰し 177

女とギャンブル 179

男と女のサケロック 184

ヘアスタイル品定め 187

さしかけられた赤い傘 190

192 踊りの場

旅のある日に

- 196 開幕ベル
200 幕が下りてみれば
204 金魚のいなくなった水槽
208 作家は語らず
212 ブル田さんとの旅
216 ウエスタン
221 グアム・サイパン連続三振
225 南極の水でオンザロック
229 車の後から免許証
233 四番手の開幕戦
237 居残り流水

242 胃痛が消えて、今

BY THE WAY

工房の秘密

男のねぐら

「書齋」と「仕事部屋」では、実際に中で行なわれる作業は同じでも、聞いた印象が大分違う。書齋にいる人は思慮深く、瞑想に瞑想を重ねてやおらペンをとり、一文字書いては推敲すいこうをし、また一文字書いて煙草をくゆらす、という思いがある。執筆に疲れると硝子戸から外を眺め、鳥のさえずりを聞いて、そこで一句と呟き、夏草やつわものどもが夢のあと、とさりげなく詠み、ハテ、どこかで聞いたなと思ひ、またさりげなく苦笑する。

そういう人は書くことに飽きると、ごく一般的な表情で哲学書などをひもときそんな気配なのだが、仕事部屋でお仕事をする人にはなかなかそのような余裕は感じられず、部屋に入るまでに相当なデモンストレーションをし、行くぞ、行くぞと騒ぎながら、仕事の前からすでに発汗している様子がある。

部屋に入ってしまったえば仕事一辺倒で、片っぱしから注文をさばき、眼は血走り、もの書き、といった優雅さは消えて、まさに職人と化す。それが眠りにつくまで続き、私はいつたい、何を目差しているのか、と疑問を感じる余裕もないままにベッドに倒れ込む。「仕事部屋」に行く人は、原稿を書く前から、札束がチラついていていのではないか、とも思えてくるのだ。

それらのことがらは私の勝手な思い込みであり、事実はまるで正反対であるのかもしれない。そういう私は、精神的には書齋の人（書齋派というには動きが激しすぎ、理論が追いつかない

と思う)を目差しており、事実、机の前ではふげばかりを降らしているのだが、部屋に入るまでには、かなりの勇気を必要としている。

だから、私はさっぱり仕事のはかどらない仕事部屋に入ることになる。洋室の四畳である。秘かに書斎と呼んでいるのだが、二間しかないアパートの一室を、書斎と呼ぶのは、精神的にもかなり疲れる。もう一室は、寝室兼居間兼食堂兼娯楽室である。

ある人が私のところへきて、部屋の中へ入るなり、ハハハ、と笑った。アパートの名前はハイム秀麗というのだが、その人はエレベーター付の巨大なマンションを想像していたらしく、パイプ製の手すりに手を置いて階段を登るうちに、つい、苦しさのあまりおかしくなってしまうものらしい。

「ここはハイムというより、秀麗荘、と呼んだ方がいいですな」

と、その人はいい、私の仕事部屋を覗いて、また、ハハハと笑った。私も笑っていたが、あまり快適な笑声ではなかったと思う。

その部屋を、ある女性週刊誌の女性記者が、写真に収めたいといってきた。

「男の部屋」というタイトルであるという。かねてより自分の部屋を公開して、その乱雑ぶりを自慢している人々を、なんとなくイヤな気分で眺めていたので、電話でその申し出を受けたときは、即座に断わるつもりでいた。私は八百屋ではありません、といったときの爽快感なども想像して、かつては一人御満悦になっていたものだが、女性記者の電話では、すっかり氣勢をそがれた。

「部屋を一度見せてもらえませんか」

と、彼女はいう。

「見る？ 見てどうするんですか」

「写真がきれいに撮れるかどうか見るんですの」

「つまり、ひどい部屋だったら写さないといいことですか」

さよう、とは彼女は答えなかったが、ニュアンスとしては肯定した模様であった。私は憤慨した。憤慨して、ふざけるな、と怒鳴るかと思いきや、是非見てくれ、とせき込んでいた。私にだって、少なからず、部屋に対する愛着があったようである。

女性記者は晩の九時頃になってやってきた。ドスのきいた声を出す割にはなかなかの美人で、男に惚れられることに少しの苦痛も感じないタイプと見えた。

「これが仕事部屋ですか」

中を見て、明らかに落胆した様子であった。狭い部屋に肘掛け椅子が二つあり、テーブル、仕事机、二つの本箱、野球道具、スキー用具、カウボーイハット、などが、乱雑さの中で、まったく何の意味も持たずに乱雑のままに置かれてあった。

「検討してみます」

といって、女性記者は水割りを三杯飲んで帰っていった。

一週間ほどして電話が入り、

「やっぱり、撮らせてもらいます」

といってきた。やっぱり、というところに一週間の検討のあとがうかがえた。撮影はひどい条件のもとに行なわれ、アクロバットの撮影をしたカメラマンは、すっかり疲れきって帰ってい